

第4回日本館基本構想ワークショップ議事録

■日 時：2020年11月27日(金) 13:00~15:00

■参加者（五十音順）：

市原 えつこ氏（メディアアーティスト）、指出 一正氏（株式会社 sotokoto online 代表取締役/ソトコト編集長）、佐藤 オオキ氏（デザインオフィス nendo 代表/デザイナー）、塩瀬 隆之氏（京都大学総合博物館 准教授）、太刀川 英輔氏（NOSIGNER 代表/デザインストラテジスト/慶應義塾大学特別招聘准教授）、田中 みゆき氏（キュレーター/プロデューサー/東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員）、平賀 達也氏（ランドスケープアーキテクト/株式会社ランドスケープ・プラス 代表取締役）、平田 晃久氏（建築家/京都大学教授/平田晃久建築設計事務所）、南澤 孝太氏（慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 教授）

■議事概要：

基本構想における、日本館のステートメントについて、各参加者からの主な意見は以下の通り。

- 「いのちが関わることで社会ができていく」という方が、共生感が出ると思う。
- 「万博によって人の成長が促されたこと（万博チルドレン）」「愛知万博が、国際ムーブメントが生み出される契機となり、多くの若い社会起業家を登場させた」ということを伝えるべき。
- 「我々は環境、流域、目に見えないウイルス等も含めた様々な「いのち」との相互作用で生きている」ということを強調すべき。
- テクノロジーは大事な要素だが、1年スパンでトレンドが変わってしまうため、長期的な目線で考えるとテーマの中心に据えすぎると古びやすく、危険な感じがする。他のテーマ性にテクノロジーを融合させるやり方がいいかもしれない。
- 「他者」や「地球市民」とは暗黙の了解で「人類」という解釈になっているのではないか。
- 多種多様な「いのち」に関する言及が少ないと思う。
- Human Centered Design や人間中心主義はもう古いと思っているので、Earth Centered Design というワードは良いと思う。
- ステートメントは万人に思いが届くわかりやすいものでなければだめだと思う。
- society5.0 が世間的にはよくわからないものなので、ある程度ステートメントの中で定義づけすべきだと思う。
- これまで出てきたワードの中で、「循環する世界」「万博チルドレン」「Earth Centered

Design」「脱人間主義」というワードに共感。「共生」という言葉は昔から言われているのに結局できていない。なぜできていないか向き合い、共生が意味するものをもう少し解像度を上げて議論し、わかりやすい言葉で伝えるべき。

- まだ「プロGRESS（進歩）」というワードを使うのか。進歩主義に重点を置くのは、前の万博の時代で終わったのではないか。個々の発展を目指すのではなく、他者とともに成長するようなビジョンを描くべきではないか。
- 主体性は大事だが、何か選択しないと参加したことにならないのは違うと思う。ただ見ているだけ、存在しているだけでも参加しているような、存在自体が肯定されるような場にできないか。
- 「共鳴」「呼応」「レスポンス」などインタラクションがあるニュアンスが欲しい。
- 「あらゆる存在としての『いのち』とともにある社会」という表現にすると、生物と無生物の間にあることも含められて良い。
- 「共生」というテーマが広いので、言葉の使い方が抽象的にならないように気を付けて議論した方がいい。
- 「循環」という言葉が入っていない。循環、サーキュレーションのような言葉は必要だと思う。
- くっきりとした輪郭がある言葉を使いたい。
- この世界で普段見えていないものや他者の視点を可視化する手法を考えたい。
- テクノロジーを使うこと自体が目的では無く、テクノロジーという手段を使って何を達成したいのか話せるといいと思う。

(以上)